－役員エッセイ－

大通公園を望む窓辺から

俺のサラメシ

常任理事　山科　賢児

毎朝慌ただしくとる定番の朝食や、家族や気のおけない相手との夕食。食事は誰にとっても人生至福のひと時である。なかでも忙しい仕事の合間に取る昼飯は私にとって特別な位置を占める。午前の仕事から解放されほっとし、これから始まる午後の仕事への活力（眠気）をつける食事になるからである。

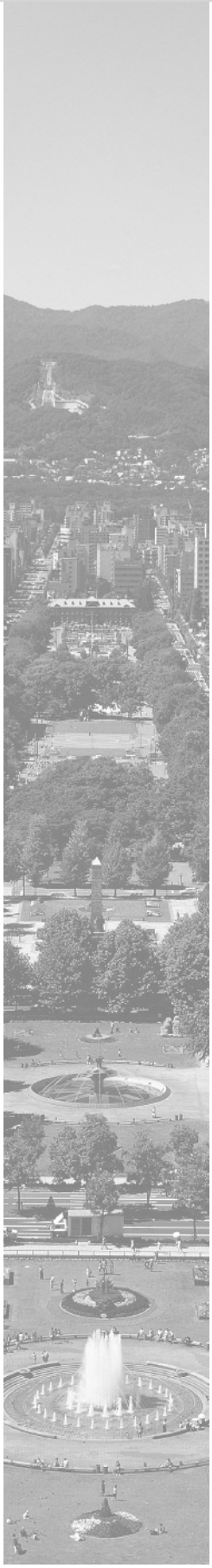
勤務医時代の昼飯は、病院の食堂か医局の近くの食堂から出前を頼んでいた。外来診療が遅くなり、大急ぎで店屋物を取りすぐに病棟に上がったのを今は懐かしく感じる。開業以来サラリーマンを見習い、もっぱら外食主義を貫いている。一日中ビルの狭い一室で診療をしていると、やはり昼はオフィスを出て外気にふれ、気分転換が必要と感じる。

昼に何を食するかはその日の気分次第である。数えてみると今まで5,000回あまりになる。大抵はもう顔なじみになったいつもの店で束の間の昼飯をとる。時間の関係上２ブロック圏内の店が昼飯の対象になるので、通ったのは30軒くらいだろうか。閉店したり移転したり、今通う店は10軒にも満たない。焼魚や中華の日替わり定食やカレー、牛丼、スパゲッティ、ラーメン、蕎麦などの麺類と、書き連ねてみるとあまり褒められるメニューではない。

NHKで放送中の「サラメシ」を楽しみにしている方は多いだろう。そのサブタイトルは「ランチをのぞけば人生が見えてくる」である。先日は「43年間勤め退職の日を迎えた男性の最後のサラメシは、いつもの店でいつもと変わらない日替わりランチだった」が放映されていた。

最近、地下歩行空間ができ人々の流れや街の風景は一変した。地上には歩く人の姿が消え、食後に立ち寄る書店やCDショップもなくなったが、近頃オフィスビルの建て替えも進んでいる。おそらく新しい食事処もできるだろう。

私のサラメシは本や映画や音楽のように、お気に入りの店に出合える貴重なひと時でもある。慌ただしい昼飯を通して人生模様が作られる。これからもどんな昼飯に出合うのであろうか、ちょいと楽しみである。



フリーランスと医師

監事　水元　修治

フリーランスとは、特定の企業や団体に専従せず、自らの才能や技能を提供することによって社会的に独立した立場から自営業を営む人の呼称とされている。

「free lance」という言葉の語源は、「自由の槍」と直訳される。

中世ヨーロッパにおいて多くの国で戦争が起こったが、当時は専属の軍隊を配備している国は少なく、槍を主体とした騎士軍団があって、この軍団と国が契約して戦争をしたとされていた。

戦闘単位の軍隊を意味していた「フリーランサー」が、いつの間にか「組織から独立して働くこと」を意味するようになった。

日本語に訳すといわゆる「自由契約」ということになるが、派遣会社と契約して働く派遣社員とは区別されている。

フリー・アナウンサー、ジャーナリストなどがこのような職種に分類されている。

医師の世界では、フリーランサーの走りは麻酔科医から始まった。麻酔科医はある一定の研修を積むことによって、国が認める「標榜医」の資格を取得し、個人あるいはグループの医師が病院と契約して術中の麻酔管理が可能になる。

またフリーの医師が増加している要因の一つに女性医師が増えていることも関係している。

内閣府男女共同参画局の2012年の統計によれば、年々女性医師の割合は増加し、1965年に女性医師の割合は、医師全体の9.3％であったのに対して、2010年には医師全体の18.9％にまで上昇している。子育てや家庭を大切にしたい女性医師への勤務体制の支援が十分とは言えない現状から、常勤就労を難しくしているといえよう。

男性医師もある程度の臨床経験を積んだ医師が過酷な常勤体制を避け所属医療機関を退職し、週２～３日アルバイト的に働く医師も多くみられるようになってきた。

今後の世の中の趨勢によって、医師の勤務実態がどのように変革をきたしていくかを考えると興味深いところである。